

貴重書室から ①

亀井孝旧蔵古活字版コレクションより〈その1〉

山田 尚子

国語学者・言語学者として著名な亀井孝氏は、昭和五十一年（一九七六）に二橋大学を退職した後、七年にわたって成城大学文芸学部で教鞭をとった。成城大学図書館には、古活字版を中心とする亀井氏の旧蔵書が所蔵されている。

「古活字版」とは、近世初めのごく限られた時期に活字によって印刷された書物のこと。十六世紀末、ヨーロッパと朝鮮から活字印刷の技術が日本に伝来した。このうち、特に朝鮮からは、いわゆる文禄・慶長の役（豊臣秀吉による朝鮮侵略）の際、たくさんの方の朝鮮版漢籍のほか、金属活字、印刷機材などが持ち帰られ、その後、日本で活字印刷が行われる契

機となった。この頃まで、日本での印刷の主流は、木版印刷（整版）であった。文禄の頃に始まる日本の活字印刷は、ほとんどが木製の活字を用いた木活字印刷で、文禄・慶長・元和・寛永・正保・慶安の約六十年間、天皇、徳川家康などの為政者、武家、医者、学者、商人など、幅広い層をその担い手として行われ、出版書も仏書、漢籍のほか、『源氏物語』などの文学書、歴史書、医書などの実用書にまで及ぶ。

ところが、やがて出版の主流は、ふたたび木版印刷へと移っていった。その理由として、活字印刷は、いったん刷り終えてしまうと組版（活字を組んで作った版）をばらしてしま

うので増刷ができないこと、訓点（漢詩文を読解するための返り点や送り仮名）やルビの入った複雑な組版がしにくいことなどが挙げられる。古活字版は、その刊行が短期間に集中している上、一度に印刷される部数が少なく、総じて極めて高い希少価値を持つ。また、中世の博士家や大寺院において学問のために用いられた、由緒あるテキストをもとにしているものが多い。

当館所蔵の亀井氏旧蔵古活字版のうち、多くを占めるのは抄物である。抄物は、主として室町時代に、禅僧、博士家の学者、公卿、医者などによって作成された、漢籍や仏典、医学、歴史書、詩集などの注釈書で、その中心は、講義の聞書や、講義のための手控えとして成立したものであり、室町時代の言語資料、就中口語資料として高い価値を有する。亀井氏旧蔵本（亀井本）には、自身で書き付けたメモが挟み込まれていることがあり、氏が、これらの書物を読み進めながら日本語について考察したその跡を、わずかながら窺うことができる。

本企画は、成城大学図書館所蔵の貴重書を毎回少しずつ紹介しようというもの。第一回の今回は、亀井氏旧蔵の古活字版のうち、『長恨歌抄』、『類証并異全九集』の二つの抄物と、

『太平記』（平仮名本）を取り上げる。

一、長恨歌抄一卷（六六一二五七） 和大 1冊

〔清原宣賢〕抄

〔慶長〕刊（古活字）

【書誌】後補茶色地巾繫文様唐押表紙（二六・五×一九・一釐）。

巻首題「長恨歌（隔格）白楽天」。次行より低格せずに前書（「長恨歌」という作品についての説明）の本文。前書（三丁一行分）に続き、二行隔てて再度、題「長恨歌（隔格）白楽天」あり。次行、低三格して題下注（漢字注）二行、以下、詩本文を掲げ、一（二格隔てて漢字注（無い句もあり）、一（二格隔てて仮名注。四周双辺（二一・六×一六・〇釐）無界、每半葉十一行、毎行二十三字内外（漢字の箇所は二十字）。版心大黒口双魚尾（丁毎に黒魚尾と花魚尾とが交互に用いられる）。魚尾間上方に題「長恨歌抄」、下方に丁数。尾題「長恨歌抄 終」。

亀井氏のメモ二枚あり。

白居易の「長恨歌」についての注釈書。「長恨歌」は玄宗と楊貴妃の悲恋を描いた長編の七言詩。白居易の詩人として

の名声を一挙に高めた作品で、平安期に日本に伝来して以来、漢詩文のみならず、『源氏物語』をはじめ、和歌などにも多大な影響を与えた。

清原宣賢（一四七五―一五五〇）は、清原家の学者。清原氏は代々、外記（詔勅の校勘、先例の勘申などを職務とする）を家職とする一方、明経道（古代学制で主に儒教經典を学ぶ学科）の博士を務める家柄で、儒教經典の考究を専門とした。宣賢は、清原家の学問の大成者として知られる。

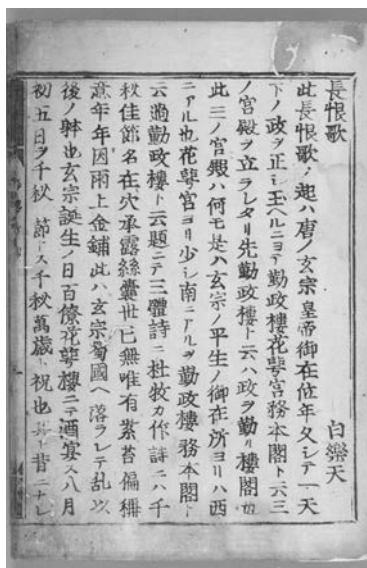
亀井本のもとになったテキストは、京都大学所蔵の清原宣賢自筆「長恨歌并琵琶行秘抄」である。京都大学本の巻首には「古文真宝前集八」とあり、巻末には、「天文十二年（一五四三）八月十五日十六日於万里小路亭講之」という識語がある。宣賢自身が晩年、『魁本大宇諸儒箋解古文真宝』に収載された「長恨歌」の本文に基づき、注釈を施したものと推される（安野博之「室町期における「長恨歌・琵琶行」享受―二つの宣賢自筆本をめぐって―」『国語国文』第六八巻九号）。宣賢抄としては、京都大学本のほか、坂本龍門文庫所蔵のものが知られるが、龍門文庫本は、平安期に伝来して継承されてきた古鈔本系統の本文に基づいて注釈がなされており、注釈についても京都大学本と異なる内容を持つ。この点につい

て安野氏は、京都大学本と龍門文庫本のいずれもが宣賢抄であることを認めた上で、龍門文庫本の基づく「長恨歌」の本文は、宣賢が三条西実隆から入手した本文で、句題和歌の素材として、あるいは『源氏物語』の典拠として用いられたものであり、一方の京都大学本は、五山の学僧による『古文真宝』の講義が盛んになった結果、「長恨歌」や「琵琶行」そのものを読み解こうという態度をもつて宣賢が先行の注釈を集成することで成立したものとする（以上、安野前掲論文）。古鈔本系統の本文だけでなく、新たに招来された『古文真宝』の本文をも柔軟に受け容れる宣賢の姿勢は、例えば経書においては朱熹の新注を積極的に受容し、兵書（『七書』）においては『施氏七書講義』と『武経直解』（『七書直解』）とを併せ用いたことなど通じるものだといえよう。

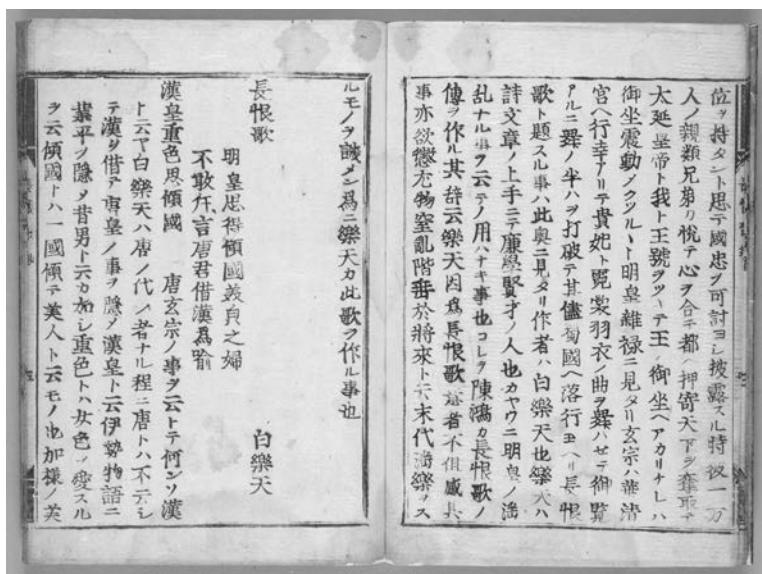
京都大学本、龍門文庫本の二つのうち、近世初期に古活字版として刊行されたのは、亀井本を含め、いずれも京大本系統のテキストで、この系統の宣賢抄が江戸期に継承されたことが窺われる。また、その場合には、「琵琶行」の注釈は省かれ、「長恨歌」の注釈のみが刊行された（国田百合子『長恨歌・琵琶行抄諸本の国語学的研究』）。亀井本を含む京大本の宣賢抄においては、まず『古文真宝』の注（漢字注）が引

かれ（これが無い句もある）、それに続いて宣賢の注が記される。古活字版として知られるものに、亀井本（慶長中双辺十一行本）のほか、亀井本の異植字版を含む七種の古活字版が知られ、さらにその整版本がある（柳田征司「抄物目録稿（漢籍集類の部）」『訓点語と訓点資料』第一二三号）。

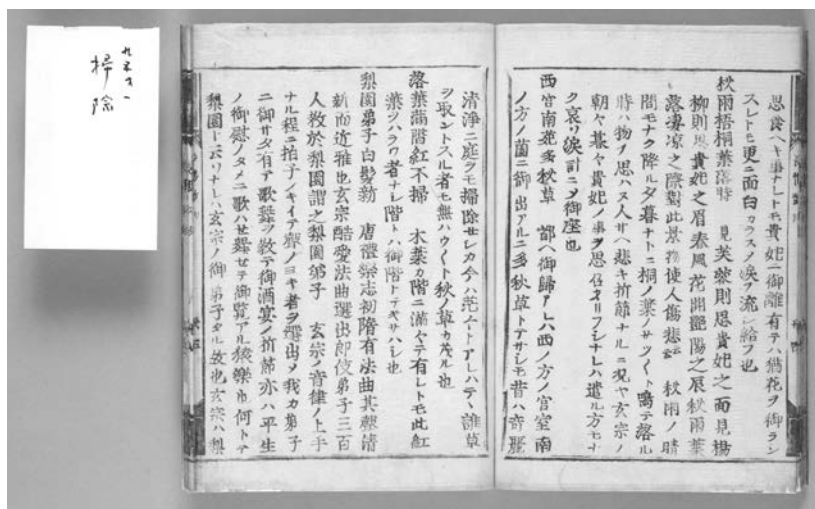
なお、亀井氏のメモのうち「有レカトモ／レはシのあやまりなるで」とある箇所（二七丁表八行目）（図版4）は、亀井本と同版の大東急記念文庫所蔵本では「シ」となっているのが確認でき、亀井本の「レ」は「シ」の一画目がうまく刷り出されなかったものであることが判明する。



〔図版1〕長恨歌抄・前書



〔図版2〕長恨歌抄・本文巻首



〔図版3〕長恨歌抄・24丁裏～25丁表、亀井氏メモ



〔図版4〕長恨歌抄・26丁裏～27丁表、亀井氏メモ

二、太平記四十巻（六六―二〇六―二四五）

和 大 四十冊

寛永元年（一六二四）八月刊（古活字）

高木利太旧蔵

【書誌】木箱入り。濃縹色表紙（二八・〇×一九・八糎）、左肩に金地金野毛裝飾題簽あり、「太平記（隔格）一（一〇四十）」と墨書。各冊（各巻）巻頭に目録一丁を附す。巻首題「太平記巻第一／序」次行より低格せず本文。毎冊一卷。

無辺（印面高約二四・五糎）無界、每半葉十一行、毎行二十字内外。版心無し、巻数および丁数はのどにあり。尾題同首（ただし、巻九および巻四十には尾題無し）。尾に刊記あり「于時寛永元年南呂下旬（隔三格）開板之」。

各冊巻首および巻四十大尾に双辺方形「高木家蔵」朱陽印あり。各冊巻末に「安田六」と墨識語あり、その下に単辺方形「白木」墨陽印あり。第二冊六丁以降、第三冊八丁以降、丁の表の左上に鉛筆にて小字の丁数（大半は偶数丁のみ）書入れ、恐らくは亀井氏による。第一冊に一枚、第三冊に三枚、亀井氏のメモあり。

『太平記』は、日本文学の作品としては最も早く活字印刷に付され、数多くの版を重ねた。しかし、その多くは片仮名本で、その刊行は慶長十年から十五年にかけて盛んであったとされる。平仮名本は、そうした片仮名本の盛行にやや遅れ、慶長十四年（一六〇九）の刊行が最初で、寛永元年刊本（亀井本）、慶安三年（一六五〇）刊本が知られる。

活字印刷で日本の連綿体の書体（漢字平仮名混じりの文章の文字と文字とを続けて書く）を再現するのはほぼ不可能で、可能な限り再現するにしても、片仮名活字の印刷に比べて多くの手間がかかる。寛永元年刊本の場合、連綿する二―三字（まれに四字以上）をまとめた活字を使用するほか、濁点付きの仮名活字や訓を附した真名漢字を混用している。川瀬一馬氏によれば、附訓活字が初めて古活字版に試みられたのは、寛永元年刊本に先行する慶長十四年刊『太平記』であったという（『増補古活字版之研究』）。こうした手間のかかる印刷をした理由として、平仮名製版の『太平記』がまだ世に生まれていなかったこと、平仮名本に装飾的・趣味的な価値が認められていたことがあるものと推定されている（小秋元段『太平記と古活字版の時代』）。亀井本もまた、濃縹色表紙に金泥裝飾を施した題簽を押す豪華な装丁の箱入り本で、この

推定を裏付けていよう。ただし、亀井本には全冊全丁に渡って手垢がつき、かつての持ち主が幾度も繰り返しこの本を手にとり、読んだことが推定される。

旧蔵者の高木利太（一八七一～一九三三）は、大阪毎日新聞の記者で、後に同専務。日本の古地誌のほか、古活字本の蒐集家として知られる。昭和八年（一九三三）刊行の『高木利太遺書古活字版展観目録』（高木氏は同年一月に逝去）には、この本が著録されている。

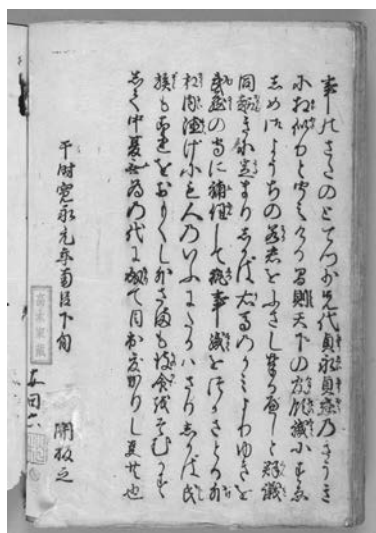
亀井本では、第一冊に一枚、第三冊に四枚、亀井氏のメモが挟み込まれているのが確認できる。そのうち、第一冊（一三丁裏）に挟み込まれたメモに「cf片カナ本／八ウ-3／2」（図版10）とあることからすると、亀井氏は片仮名本と対校させながらこの本を読んだものと推測される。



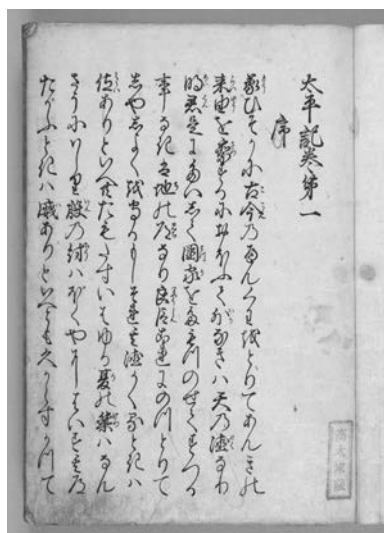
〔図版6〕太平記



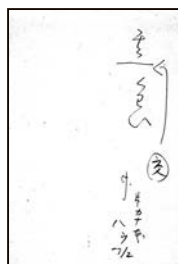
〔図版5〕太平記



〔図版8〕太平記・刊記



〔図版7〕太平記・巻首

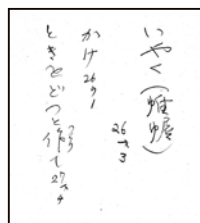


〔図版10〕亀井氏メモ



〔図版9〕太平記・巻一・13丁裏～14丁表

※〔図10〕のメモの該当箇所は13丁裏7～8行目であることが推される。

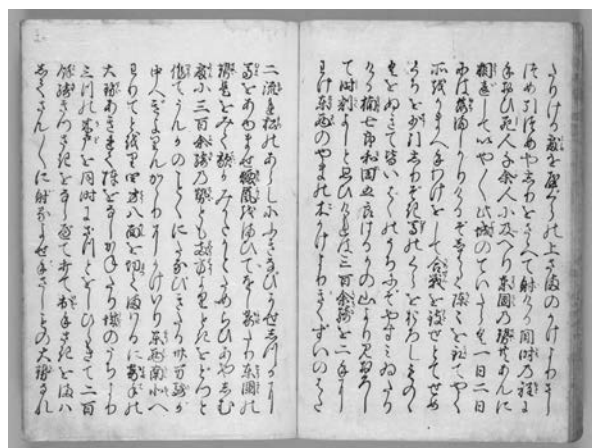


〔図版11〕亀井氏メモ



〔図版12〕太平記・巻三25丁裏～26丁表

※〔図11〕のメモは〔図12〕の箇所に挟み込まれている。



〔図版13〕太平記・巻三26丁裏～27丁表

三、類証弁異全九集七卷（六六一―七四一八〇）

和 大 七 冊

〔曲直瀬道三撰〕

〔元和〕刊（古活字）（単辺十二行本）

尊經閣文庫旧蔵

【書誌】 木箱入り。茶色表紙（二八・一×二一・〇糎）、左肩に題簽あり、「類証辨異全九集（隔二格）一（一七）」と墨書。右上から中央にかけて目録題簽あり。

各冊（各巻）巻頭に目録あり。巻首題「類証辨異全九集巻一／診脈榮衛之分別」次行より低格せず本文。毎冊一卷。

四周単辺（約二一・五×一七・二糎）無界、每半葉十二行、毎行二十五字内外。版心中黒口双花魚尾、魚尾間上方に題「全九集巻幾」、下方に丁数。尾題同首。

各冊巻頭に単辺方形「前田氏／尊經閣／圖書記」朱陽印あり。第七冊（巻七）にしばしば墨筆による標鈎の書入れあり。

医書。身体をめぐる様々な症状やその対処法などについて具体的に解説するもの。原典は月湖の『類証弁異全九集』だ

と考えられるが、道三の『類証弁異全九集』と月湖の『類証弁異全九集』との関係についていえば、他の抄物が原典の注釈書であるのに対し、道三の『類証弁異全九集』は原典全体の意図を汲んで和訳している点に特徴がある。月湖という人物については諸説あり、詳細は不明。明に渡った日本僧だといわれる。曲直瀬道三（一五〇七―一五九四、名は正盛、字は一溪）は、安土桃山時代の医者。正親町天皇、將軍足利義輝、豊臣秀吉などから重用された。

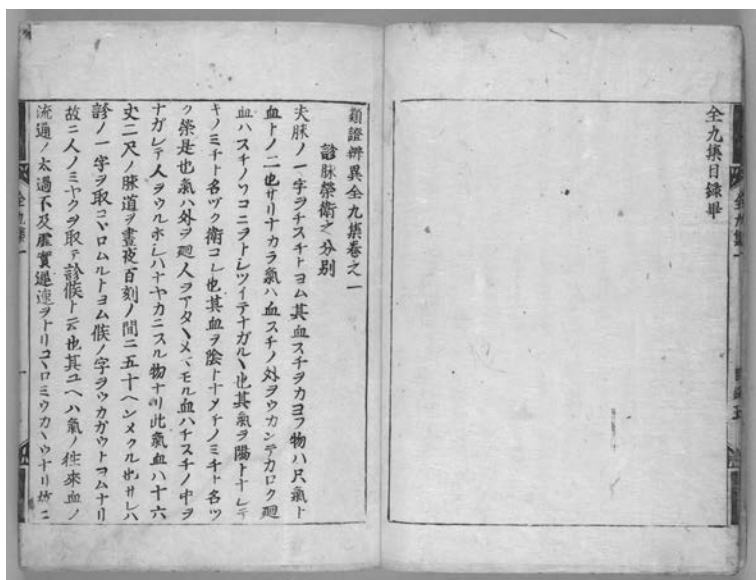
『類証弁異全九集』は、多くの写本が現存するのに加え、古活字版についても元和刊本として亀井本以外の一種（双辺十二行本）の存在が知られるほか、別の古活字版が寛永中にも新たに刊行されたことが確認される。また、元和寛永以降多くの整版が作られており、医書としての權威を有する書物であったと考えられる。亀井本には濁点付きの仮名が用いられている場合があり、この点でも注目される（『曲直瀬道三類証弁異全九集』（亀井本の影印、勉誠社刊）「解説」柳田征司執筆、後『室町時代語資料としての抄物の研究』に収録）。図の部分は整版で作られたものが組み入れられている。また、割注（小字双行）のための小字の活字が使用されている。

亀井孝氏と親交のあった眼科医中泉行正氏（一八九七―一

九七八)に「我国医学の発展と全九集」(『総合医学』第一五卷九号、一九五八年九月)があり(中泉氏は古医書の蒐集家でもある)、この論文の執筆は「類証弁異全九集」の零本を亀井氏が中泉氏に贈ったことがきっかけという。論文の中で中泉氏は、本書が世に歓迎された理由として、①内容が近世医学の濫觴という側面を持っていること、②仮名交じり日本語で書かれていること、③たびたび版行されたこと、の三点を挙げ、古活字版二種、製版四種、永禄九年写本の計七種の刊本・写本を写真入りで紹介する。また、臍のルビが「ホソ」と「ヘソ」との両様あることなど、国語史に関する事柄にも言及しており、論文の最後には亀井氏の教示に対する謝辞が述べられている。

昭和五十七年(一九八二)に亀井本の影印(前掲書)を出版する際、亀井氏は、その「解説」を柳田征司氏に依頼し(前出「解説」、その出来栄えに「驚倒した」という(同書「序文」亀井孝執筆)。

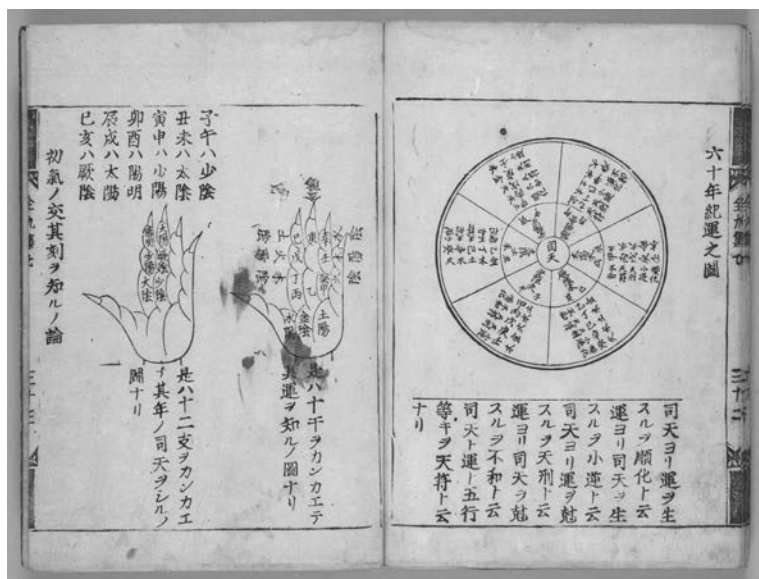
(やまだ・なおこ 成城大学准教授)



〔図版14〕類証弁異全九集・巻首



[図版15]類証弁異全九集・卷七・27丁裏～28丁表



[図版16]類証弁異全九集・卷七・32丁裏～33丁表